

スフィンクスの頭が崩れ落ちる！



この2月エジプトを訪問、カイロ市街からギザのピラミッドに向かった。街からやや小高い砂漠の丘陵に三つのピラミッドが見えてきた。クフ王、カフラー王、メンカウラー王のピラミッドである。そして、カフラー王のピラミッドの正面には、数千年の歴史を見つめてきた、人面獣身（頭は人間、身体はライオン）のスフィンクスが、今も視線を遠くに投げかけている。

でも、その鼻は削られ、アップで写した顔の相当部分が風化しているのがわかる。日本出発の前日、たまたま朝日新聞の夕刊がスフィンクスの危機を報じていた。時の経過と、気温の変化、周囲の人間が発する空気の酸化が崩れをもたらしているのだという。

「あと100年で頭が崩れ落ちる！」——そんな報道も決して誇張ではないと思われた。像の片側には、やぐらが組まれ補修作業が行われていた。夢の世界遺産の保全をなんとか！

ピラミッドの建設は公共事業だった？

クフ王のピラミッドのふもとに立った。1個が平均2.5トンという巨石が230万個も積み上げられ、頂上まで続いている。メキシコのティオティワ坎のピラミッドは人間が頂上まで登れる石の階段があった。だが、ギザのピラミッドに登る道はなく、その急勾配は登ろうとする人間を寄せつけない。

4千年以上も前に、なぜこんな巨大な建造物を作ったのだろうか。今日までさまざまに議論されているが、やはり「王の墓だった」という説が有力のようだ。そしてその工事は、奴隷による強制労働というより、ナイル川の氾濫期に農業ができない人のために行われた公共事業だった、との説が強い。同感である。



スイスの高校生たちの“人間ピラミッド”



三つのピラミッドが見える展望台へ足を運んだ。砂嵐が吹く大地に立つ。500mほど遠方に、カフラー王のピラミッド、その左にクフ王、右にメンカウラー王のピラミッドが順序よく並んで見える。観光客のグループがピラミッドをバックに記念撮影をしている。と、面白い光景に出くわした。

30人ほどの若者が3段ピラミッドを組み上げ、歓声を上げながら写真を撮っていた。古代の石のピラミッドの前で、現代の“人間ピラミッド”。面白いではないか！興に乗ってこちらにも撮影班に飛び入りしシャッターを押すと、一番上に乗った女の子に声をかけた。

「どちらのお国から？」「皆さんは高校生、それとも大学生？」

ピラミッドから降りると満足そうな笑顔で彼女は言った。

「スイスからよ。私たち高校生。修学旅行で来たの」

明るく歯切れがよい。日本でも学校の教科書に出てくるピラミッド。きっと世界中からの中学生や高校生も、この古代遺跡の前で、同じようなアクションを起こしているかもしれないナ。

ナイルクルーズ紀行

ピラミッド訪問前に、ナイル川下流のカイロから中流のルクソールへ飛んだ。そこからクルーズ船で上流のアスワンまで。移り変わる沿岸の光景、ナイルに沈む夕日、数々の遺跡。世界最大の人造のナセル湖には驚異の世界遺産アブシンベル神殿があった。

「名作の舞台を訪ねて」の番外編で写真を紹介していますのでご覧ください。

